

斎藤健太 (作家・映像作家)

「映像と祭り」を考える時、はからずも山形と縁浅からぬ一本の映画を私は思い浮かべる。鶴岡市出身の監督、本多猪四郎による『ゴジラ』(1954)である。

物語前半、主人公は漁船襲撃事件の真相を追って、船員が流れ着いた大戸島へ足を運ぶ。そしてその夜、島では古来より伝わる海獣を鎮めるため、神社にて厄払いの神楽が奉納されるのである。

一見すればゴジラ の存在を説明するための一幕にしか思えないこの場面、実は(楽曲こそ創作されたものではあるが)ロケ地の島に実在する神楽を急きよ採用したのだという。確かに幻想的なシーンではあるものの、神楽の直前にも主人公は島の古老から「伝説の巨大生物」の言い伝えを聞いているくだりがある。つまりは神楽の描写がなくとも物語は成立するのである。ならば何故、このシーンを監督である本多は本編に盛りこんだのであろう。

思うに、この場面こそ戦後まもない日本を象徴する、きわめてシンボリックなシーンだったのではないだろうか。

モノクロームの画面に浮かびあがる土着の祭礼は、この島が都市化めざま

しい東京、ひいては上映当時の日本とは異なる空間なのだ と観客へ報せている。加えて、かつて日常のひとつコマであった祭礼が異文化となった現状を伝え、同時に古の慣わしではもはや災厄と和解できなくなった事をほのめかしている。事実、皮肉にも「神鎮めの儀式」を終えた嵐の夜、島は当の神である大怪獣によって無慈悲な襲撃をうけ、やがてゴジラと名づけられた巨大生物は首都東京を目指して進撃、ラストでは禁断の化学兵器によって海の藻くずと化する。

そう、大怪獣ゴジラは「祭礼の時代」という岸辺から「科学の時代」なる対岸へと橋を渡りきってしまうのである。

それはきっと、幼少を出羽山中の古刹で過ごし、のちに帝都へと居を移した本多監督自身の思いを色濃く反映したものであったはずだ。戦前戦後と、多くの「見えない何か」を棄てて新しい時代へ突入していく恍惚と不安が、作品の傍らに添い寝していたはずだ。

何故、唐突にこんな話を始めたのだと訝しむ方もいるかと思う。ドキュメンタリー映画祭と怪獣映画に何の関係があるのかと、首を捻っている方も少なくあるまい。

否、無関係ではないのだ。

映像の中に「祭り」を見る時、きっと私達は無自覚なままに本多のまなざしと同じものをそこに見いだしているのではないか。懐かしいのに何処か異質で、華やかでありながら何やら亡霊然とした陰影を伴っている。そんな陰と陽が同居するさまを、スクリーンに見つけるのではないか。

古来、人間は手綱を握れぬ何者かを畏れ、敬い、慈しみ、感謝しながら暮らしてきた。その感情を具現化した行為こそが祭礼行事だったのではないか。地理や気候や文化背景など、その地で祭がおこなわれる必然があったのではないか。しかし今やその必然は失われ、伝統の継承や観光客誘致といった付加価値なしでは語れないものになってしまった。必然を有しつつも矛盾を孕んだ、過去と現在を繋ぐ歪な綱。それこそが「祭り」なのではないか。

そこに、フィクションやドキュメンタリーといった差異はない。あるのはただ、現代に残された「過去の瘡蓋」だ。被写体や取材地という「肉体」に刻まれた傷跡なのだ。

そんな思考を頭の片隅に置いて、いま一度本映画祭の作品を見てほしい。そこに描かれた「祭り」を見る時、もしかして作品の持つ意味はいつそう深く、多面的になるに違いない。私はそう、考えている。